佐　藤　正　恵（さとう　まさえ）

学位の種類	博　士（教育学）
学位記番号	教 博 第 30 号
学位授与年月日	平成5年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期3年の課程） 教育心理学専攻
学位論文題目	健常乳児と障害乳児の能動的活動の発達とそれに及ぼす 大人の働きかけの効果
論文審査委員	（主査） 教 授 松 野　豊　教 授 永 渕 正 昭 教 授 村 井 憲 男

論文内容の要旨

1．乳児期の発達水準における健常児と障害児の能動性の発達を、乳児期前期では「おはしゃぎ反応」、中期では「志向的行動」、後期では事物操作行動を指標として明らかにするとともに、能動性の高次化における大人とのコミュニケーション活動の重要な役割を明らかにした。

2．論文の構成は次の通りである。

はじめに

序論

第1章　能動性についての考え方

第2章　乳児期における主要な活動の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果

第3章　本研究の目的

本論

第1部　乳児期前期の能動性の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果－「おはしゃぎ反応」を指標として－

第4章　健常乳児の人と事物に対するおはしゃぎ反応の生成と発達

第5章　障害乳児の人と事物に対するおはしゃぎ反応の発達と特徴

第６章　事物に対するおはしゃぎ反応の発達に及ぼす大人の働きかけの効果

第２部　乳児期中期の能動性の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果－「志向的行動」を指標として－

第７章　健常乳児の人と事物に対する志向性の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果

第８章　障害乳児の人と事物に対する志向性の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果

第３部　乳児期後期の能動性の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果－事物操作行動を指標として－

第９章　健常乳児の事物操作行動の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果

第10章　障害乳児の事物操作行動の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果

結論

第11章　考察と今後の課題

第12章　結論

要約

3．玩具を持続的にもてあそばない、玩具が視野から消失してもそれを見ずから捜そうとしない、対象を明確にした活動に乏しいなどは障害児にしばしば指摘される特徴である。筆者はこれらを能動性の問題としてとらえ、これらが障害児において広範な年令にわたって指摘されることからこの問題が障害の本質の１つであり、また能動性の欠如が心理発達の困難をもたらす大きな要因の１つであると考えている。そこで本研究は、より早期より心理発達を促進すべきであるという観点より、乳児期における能動性の発達とそれを促す方法について明らかにすることとした。能動性の発達を促す方法に関しては、子どもの心理発達が社会－歴史的なものであるならば、能動性もまた大人との社会的な相互作用によってこそ発達すると考え、大人の働きかけに注目している。

序論では、第１章で能動性という用語が従来は活動への準備状態、活動状態、主導性を発揮している状態をさして用いられてきたこと、能動性の指標としては対象への定位、活動の持続性や強弱、情動表出などを取り上げることが妥当であること、能動性の現われは応答的な環境のあり方によって変化することなどを主に指摘している。第２章ではこれまでの発達研究から、乳児期前期では人に向けた「おはしゃぎ反応」中期では自ら対象をとらえ向かおうとする「志向的行動」、後期では事物操作行動が各時期の主要な活動としておおむねとらえられ、これらにおいて能動性を検討することが妥当であるとした上で、こうした活動に関する健常児と障害児の先行研究を整理している。その結果、各活動の内容、例えば乳児期前期のおはしゃぎ反応の構成要素である微笑や、中期の志向的行動の現われである手伸ばし（reaching）、後期の手操作などの様式の発達課程に関する研究は多いものの、能動性の側面も含めて活動をトータルにとらえてはいないこと、また大人との関わりの重要性に関しては、ホスピタリズムの問題として大人との関わりの欠如が

もたらす子どもの否定的現象を強調する研究がほとんどで、心理発達に大人との接触がもたらす肯定的影響を乳児の諸種の活動において具体的かつ科学的に立証した研究は意外に少ないことを指摘している。そこで、能動性の発達とそれに及ぼす大人の働きかけの効果を検討することが本研究の目的となるが、その際、活動状態（運動行為の持続性や強弱、情動表出が指標となる）、活動への準備状態（興味の兆候としての定位の様子）、主導性や志向性を発揮している状態（イニシアチブをとる、自ら対象をとらえる）といった諸側面から能動性を検討するとしている。

本論は３つの部分からなっている。第１部では乳児期前期の能動性が検討された。ここで指標とされたのは、乳児期前期にのみ出現する集中（身動きを止めて対象に定位する）、運動性活気（頭、手足、躯幹のエネルギッシュな運動）、微笑および発生の４成分からなる活気に満ちた複合的なおはしゃぎ反応である。これまでこれは人にも事物にも生起するとされながら、事物に対しては十分検討されず、また両者に対する同反応の詳しい生成・発達過程が明らかにされていなかった。さらに障害児に関する検討は皆無であった。そこで、まず、健常児について人（主に母親）と事物（ガラガラや人形など）に対するおはしゃぎ反応の生成過程を１名の子どもを対象に生後２日目から自然的条件で観察し、さらにこの結果を確認し、その後の発達過程を明らかにするために、生後１か月から６か月までの機関各月齢７名ずつとなるように準縦断的観察を行なった。乳児の眼前にガラガラ（刺激性の弱いものと強いものの２種）と母親（無言無表情の場面と名前を優しく呼ぶ２種の場面）を出現させ、おはしゃぎ反応を実験的に観察した（第４章）。障害児については、これと同じ実験により観察開始時生後１か月から10か月の股関節脱臼児１名、ハイリスク児９名、ダウン症児３名の計13名を４－７か月間観察し、さらにおはしゃぎ反応の特徴と予後（観察終了時より６か月から３年後の発達状態）との関連を調べた（第５章）。また先行研究では、大人との関わりによって乳児の全般的な活動水準が高まり、事物に対するおはしゃぎ反応が活発になるという能動性を促す上で示唆的な指摘がなされながらも、その実証が不十分であったため、第６章で月齢１－４か月の健常児１名、ハイリスク児２名、ダウン症児２名の計５名を４－７か月間観察し、玩具のみ呈示する場面と玩具を母親が持って動かしたり言葉がけしながら呈示する場面でおはしゃぎ反応を比較した。

健常児の主な結果は次の通りである。１．おはしゃぎ反応には活動状態としての能動性（運動性活気、微笑、発声の複合）と活動への準備状態としての能動性（活動の前に身動きを止めて対象を注視する）、主導性としての能動性（無言無表情の母親に自らコミュニケートする）が反映される。２．活動状態としての能動性を乳児に最も早く、またより強く導くのは事物ではなくコミュニケーション作用を行なう大人である。３．大人に対するおはしゃぎ反応は完成しているが、事物に対するそれは完成していない時期（生後２か月頃）に、大人が事物を持って乳児に働きかけることによって事物に対する一層長い集中が促され、また微笑や発声が初出し、おはしゃぎ反応が完成する。以上のうち特に２と３の結果は、この時期の外界に対する能動性の生成・発達にとってとりわけ大人のコミュニケーション作用が重要であることを示している。

障害児の主な結果は以下の通りである。1．第5章で観察した13名中6名に活動状態としての能動性や主導性としての能動性に乏しいという問題があり、1名には活動への準備状態としての能動性に著しく欠け、多動的であるという問題があった。2．この7名は予後が悪く、特に多動的な子どもは1歳台後半でもこの特徴を示し続けた。他方、おはしゃぎ反応に問題がなかった他の6名は予後が良かったことから、おはしゃぎ反応が予後予測（障害の有無と障害の性格の予測）の際に有効な指標となることが示唆された。3．事物に対するおはしゃぎ反応の発達に及ぼす大人の働きかけの効果については、健常児と同様、大人の関与によっておはしゃぎ反応の完成が導かれ、またいずれの月齢でも活動状態としての能動性が高められた。

第2部では乳児期中期の能動性が検討された。筆者は、生後5－6か月になると、大人が対象を特に強調して注目させなくとも、乳児自ら対象をとらえ、手伸ばしや移動行動によって対象に向かおうとし始め、乳児の活動の方向性や主体性をそれ以前の時期より明確にとらえやすくなることを指摘し、こうした自ら対象をとらえ向かおうとする心理特性を先行研究に従い「志向性」と呼び、これを乳児期中期の能動性の重要な現われととらえている。人に対する志向性を検討するためには乳児の前方に母親（無言で乳児に両手を差し出す場面と乳児の名前を優しく呼びながら両手を差し出す場面がある）を、事物に対する志向性を検討するためには和ダイコとバチ（乳児がタイコとバチで単独で遊ぶ場面と母親が関与しタイコとバチを用いて乳児と自由に遊ぶ場面がある）を呈示した。志向性の強弱をより明確に捕らえるために、観察は、大人が援助して物に向かい易い姿勢をとらせるのではなく、未熟であっても乳児自らとれる姿勢をとらせ、さらに、手を伸ばしただけでは届かない距離に対象を置くという抵抗の大きい条件で行われている。健常児については生後5か月の乳児5名を9か月齢まで5ヵ月間、障害児はダウン症2名――暦年齢（CA）12か月から18か月まで、発達年齢（DA）でいえば7か月から10か月まで――と脳障害児（脳室拡大、小脳萎縮）1名（CA 10か月から17か月まで、DA でいえば6か月から9か月まで）を観察した。なお事例的観察として、1歳4か月の発達遅滞児（DA 4か月）に11か月間志向性を促す指導を行なった。

健常児の主な結果は次の通りである。まず人（母親）に対しては、5か月では腹臥位でも活発なおはしゃぎ反応を示すが、6か月では大人にほとんど関心を示さなくなり（この観察場面で）、7－8か月には再び人への関心が復活し、極めて強い志向的行動が生ずる。9か月には母親を介して外に向かうようになる。事物に対しては、1．全月齢とも抵抗が大きくとも自ら対象にただちに定位し、注視し続け、向かおうとし、こうした志向性の高まりにより匍匐移動を開始する。2．事物に対して7か月までは母親の関与がない場合非特異的に操作する活動状態としての能動性が旺盛に発現し、母親の関与がある場面では母親の特異的操作をじっと注視する時間が増大する。3．8－9か月には母親の関与がある場面では一部の乳児で母親の操作を注視した後、特異的操作を行なうようになった。このうちじっと注視する行動は、より高次な活動（特異的操作）への準備状態であり、能動性の極めて重要な側面であると推測される。

障害児の主な結果は次の通りである。1．母親の関与がない場面では事物にただちに定位しない、いったん定位しても容易に損なわれる、健常児群と比べて手伸ばしの回数が少なく、移動しようとしないなどの志向性の乏しさがあり、また操作時間が短いなど活動状態としての能動性も乏しい。2．DA 8－9か月になっても母親の操作を注視するに至らず、特異的操作も獲得しない。3．母親への志向的な行動を獲得した子どもでは、母親が遊びに関与する場面で志向性も、活動状態としての能動性もともに促されたが、母親への志向的行動のない子どもではいずれも促されなかった。4．事例的観察からは志向性を促す上で大人とのコミュニケーション関係を確立すること、抵抗の小さい条件から働きかけを開始することの重要性が示された。

第3部では事物操作行動を指標に乳児期後期の能動性が検討された。筆者は第2部で特異的操作獲得に活動への準備状態としての能動性の発現が重要であると推測したが、この能動性の発現および操作方法の高次化と大人の具体的な働きかけとの関連については不明確であったため、ここでは主にこれが検討された。観察場面は乳児が積み木とカップを用いて単独で遊ぶ場面と、母親がこの玩具の特異的操作を演示した後にこれらを用いて乳児と一緒に自由に遊ぶ場面である。観察は、健常児については、CA 6か月から12か月までの6名について2－8か月間（全体の観察月齢は6か月から14か月まで）行なわれ、障害児については、医学的所見のない精神発達遅滞児2名（CA 18－29か月、DA 8－12か月）とダウン症児2名（CA 21－27か月、DA 9－12か月）の計4名について行なわれた。

健常児の主な結果は次の通りである。1．乳児に非特異的操作が多い6－9か月は母親は操作の演示を最も頻繁に行ない、この結果、乳児にそれを注視する活動への準備状態としての能動性が発現する。2．9－10か月には母親の関与場面で特異的操作を獲得した後、単独場面でもこの操作を安定的に行なうようになる。3．特異的操作獲得後は母親はそれを賞賛する言葉がけを頻繁に行なうようになり、この結果、乳児の大人へのコミュニケーション形態が事物を介したものへと変化する。

障害児の主な結果は次の通りである。1．そもそも操作の持続性に欠けるため母親は事物の呈示や一緒に手をとり操作する共同行為を頻繁に行ない、この結果、まず活動状態としての能動性が高まる。2．その後は母親は演示を最も頻繁に行なうようになり、DA 9－11か月には子どももそれを注視し始め、特異的操作を獲得する。つまり、障害児では大人の関与は活動状態としての能動性の発現をまず促し、次に活動への準備状態としての能動性の発現を促すという能動性の両面への効果を介して操作方法の高次化に効果を持つ。3．単独場面でも特異的操作を行なうようになるにはその後2－4か月を要し、また特異的操作が安定しないために母親の賞賛はほとんど生じず、コミュニケーション形態の高次化も遅れる。

結論として次のように述べている。障害児では認識活動の主に操作・技術的側面を検討していると思われる発達検査によって発達月齢を一致させても健常児群に比べ定位が困難である、活動の持続性に乏しいなどの能動性の乏しさがある。また障害児の能動性の問題は一様ではなく、す

でに乳児期前期から活動状態としての能動性に乏しいという問題と、活動への準備状態としての能動性に著しく欠けるという問題が抽出され、前者は寡動的、後者は多動的な症状を呈する。このうち多動的な子どもではその後もコミュニケーションや特異的な操作方法の発達が著しく遅れがちである。

大人の働きかけの効果に関して特に注目しうるのは、乳児期後期に大人の働きかけが活動への準備状態としての能動性の発現を促し、このことが操作方法の高次化をもたらし、さらにこれがコミュニケーション形態の高次化を導いたことである。特異的操作や事物を介したコミュニケーション活動は1歳台以降顕著になる活動であるが、これがそれ以前に大人の働きかけによって生起し始めることは、大人の働きかけの重要性を示すものである。障害児については、この他に、大人の働きかけによっていずれの時期でも健常児群では特に問題にならなかった対象への定位や活動の強さ、持続性など活動状態としての能動性が強く喚起され、健常児群以上に大人の働きかけが重要であること、また能動性を促進する上でコミュニケーション関係自体の確立が重要であることが強調された。

論文審査結果の要旨

本研究の意義は何よりも子どもの能動性を扱った点にある。能動性は、最も一般的にいえば、主体と周囲の現実との相互作用の程度と考えることができる。それは内的過程の形態においても、外的現われの形態においても存在する。能動性も、内容的側面と形式－力動的側面を区別できるが、本研究は主として後者の側面を扱っている。本研究はまた、能動性の向かう対象として人と物が別々に取り上げられているが、同時に、両者はその相互関係において考察されている。こうして乳児期全体にわたって能動性の生成・発達過程が一貫して明らかにされ、さらに人がまさに子どもに人間的にかかわることによって、能動性が高められることが実証的に示された。また、この大人の具体的かかわりの様態は子どもの能動性の発達水準に応じて変わることが明らかにされた。

障害児について見るとき、発達月齢を揃えて比較した場合でもその能動性は健常児に比して乏しいが、単に乏しいだけでなく、独特の現われをもっている。特に乳児期前期の能動性を検討する際に指標とされたおはしゃぎ反応には障害の有無とその性格に関する診断的意義のあることが推測された。これは、このような早期には障害の診断が困難な現状において重要な発見であり、今後の研究の発展が期待される。また、おはしゃぎ反応はそれ自体能動的活動であり、それを高めることが心理発達を促すことになるので、おはしゃぎ反応による診断は指導と極めて結びつけやすい利点がある。

乳児期中・後期の発達段階では、大人の働きかけとこの段階での能動性の発達、またその能動性の発達と操作方法の発達、さらに操作方法の発達とコミュニケーションの発達との力動的関係が明

らかにされた。これは心理発達のメカニズムの具体的解明において一歩を進めたものといえる。またそれは操作方法のみの形成を追求し、能動性の側面を軽視しがちであった従来の障害児への指導方法に対し、より全面的な発達を促す働きかけの重要性を示す貴重な資料を提示している。

よって、博士（教育学）の学位を授与することを適当と認める。